

骨折でレース続行 賛否

実業団対抗女子駅伝予選会

「意思尊重」「体が第一」

福岡県で21日開催された全日本実業団対抗女子駅伝の予選会で、2区の選手が脚を負傷後、四つんばいになって前進を続け、賛否の議論が巻き起こっている。何とかたすきをつないだ選手に称賛の声がかかる一方、大会運営者側に対し「レースをやめさせるべきだった」との批判も相次いだ。

痛ましい姿がテレビ中継されたのは、岩谷産業で2区を任された飯田怜(19)。第2中継所手前約200mで立てなくなり、両手と両膝をついて進んだ。待ち続ける次の走者が涙を浮かべる場面も。たすきを渡し終えた飯田の両膝は、路面ですり流血していた。レース後、右すねを骨折する大けがだったことが分かった。

リタイアさせる選択肢はなかったのか。日本実業団陸上競技連合などによると、倒れた飯田は審判員に「あんなに走りたいです」と残り距離を尋ね、たすきをつなぐ強い意思を示していた。大会本部のテレビ中継で選手の異変を確認した岩谷産業の広瀬和監督は棄権を申し出たが、現場での連絡がうまくいかず、最終的に現場の審判員に伝わったときには中継所まであと20分ほどだった。審判員は選手本人の意向もあり、そのまま見守ったという。

テレビ中継では、大会関係者とみられる男性が「行かせたい」と発言する声も収録されていた。一方岩谷産業は「運営側に棄権を要請したが、そのまま2区を終えた。非常に遺憾」としている。

ツイッター上では「駅伝には後に続く仲間がいる。飯田選手の根性と執念に感動」「選手の手を一番に考え、すぐに周りが止める」と賛否が交錯した。

テレビ中継の解説者を務めたスポーツライターの増田明美さんは「係員や審判が勝手に止めるわけにはいかない。選手が行きたいと言っているわけだから。(係員らは)選手に寄り添った対応だった」と話す。一方で、選手や監督の意向を確認せずに止めるガイドラインを作る必要性も感じたという。

スポーツ評論家の玉木正之さんは「勝ち負けへのこだわりの行き過ぎを抑制するのも主催者の役割で、止めるべきだった。『命のたすき』などと美談にすべきでない」と指摘。「どして、誰が、どのようなやりとりをしたのか。その時点で残り何分あったかをきちんと検証すべきだ」と提言した。

2018年
10月23日
朝刊

① 新聞記事に取り上げられた内容は、駅伝予選会の何区でのできごとか。

[]区

② 記事には、駅伝大会で骨折した選手にレースを続けさせたことについて、「賛否」両方の意見が書かれている。それぞれの意見を記事の見出しの中から選び、()に書きなさい。

賛(賛成) → [] 否(不賛成・反対) → []

③ 記事の4段目に「選手や監督の意向を確認せずに止めるガイドラインを作る必要性」とある。あなたは、「どのような場合に、選手や監督の意向を確認しないで選手を止めるべきだ」と考えるか。あなたの考えを40字以内で書きなさい(句読点を含む)。

年 組 名前